

多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅲ)

多和田真淳・知念 勇

運天貝塚

発見年月日 発見者不明

今帰仁村字運天白間原にある沖縄編年前期から後期にまたがる遺跡群である。運天の北方・古宇利島に対面する海岸崖下にある東汲川の泉を中心として遺物が散布する。

1969年新田重清氏等によって、試掘調査が行なわれている。その資料の一部を多和田が今帰村史に紹介した。^{注1}新田氏によると「土器の分布は、泉を中心に崖上の台地、崖下の畠地及び海岸の防潮林近くまで広範囲に及ぶ」とある。^{注2}

この貝塚最下層から出土した、口縁部に4条の細刻線をめぐらし、細線上に刺突文を施した深鉢形の土器を多和田は運天式と命名した。

採集品には土器、石器、貝製品があり、土器は無文の胴部をのぞき、報告する。

土器

第1図1～9の口縁部9個と第2図10～35の底部25個がある。図1の1は口縁部が外反し、胴部が内傾する深鉢形の土器で、胎土には石英、砂粒等を混入する。外面は黒色で内面が褐色をなし、口頸部には製作時の指頭圧がみられるが文様はない。内外面に荒い擦痕を残す。口径推算23.3厘、器厚は胴部で6粂で焼成良好。

図1の2は、口縁部がかるく外反する深鉢形で、1同様胴部は内傾する。外面下端部は褐色で上部が黒色、内面は一様に褐色となる。口頸部に山形沈線文が一条めぐらされている。口径15.3厘、器厚5粂、胎土には石英と赤褐色の粒が混入、器色は内面褐色外面黒色である。

図1の3は器形、胎土は1に同じであるが器面は表裏面とも黒色で、軟質でもろい感じの土器である。

図1の4は器形は1に近い深鉢形の土器で、外反する口縁部から胴部への移行部分が外側へ盛り上っている。胎土には石英、砂粒等が混入するが表面調整が良好なため、精選された胎土である。外面上部は黒色、下部が褐色、内面部は黒色、上部は褐色である。

図1の5は外反する平口縁の深鉢形土器、胎土には石英粒、石灰岩粒、黒色の鉱物質粒、赤色粒が混入している。内外面とも均一に黄褐色を呈するがもろい感じのする土器である。

図1の6と7は壺形の土器で、同6は口径6.8厘。長頸で胴部に膨みをもつ小形の壺である。胎土及器色は5と同様であるが焼成は良く硬い土器である。

図1の7は小破片のため口径は不明、胎土には少量ながら石英粒が混入。焼成が良く精選された緻密な感じの土器である。外面は黒色であるが全体的に淡黄色を呈する。外面に擦痕状の調整痕を残している。

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)
(★★ちねん いさむ 県立博物館主任学芸員)

図1の8は口縁部が外反する深鉢形土器で口縁部は平坦になり、胎土には石英粒、砂粒が多く含まれる。器の表面が剥離しているため手ざわりがザラつく感じである。外面は黒色で内面赤褐色の脆弱な土器である。

図1の9は口縁が外反する壺形の土器で、口縁部が外面へ折り曲げられている。口径部から口縁部にかけて、幅6粂の凸帯文が鞍状にはりつけられている。外面暗黒色で、胎土及混入物は8に類似する。

底部は図2の10～35の25個あるが、第31・35の2点をのぞいては、すべて、くびれ平底である。

図2の10・11・14～21・24・26・27・32は、底部から胴部への立上りが急で、胴部に膨みをもつタイプである。図2の16は底径7粂、底部厚1.8粂の厚底で上げ底状をなす。胎土には石英粒、砂粒が混入する。内外面とも赤褐色を呈し、内面には器面調整の条痕が認められる。底部の内外から図の点線にみえるような貼付が認められる。

図2の11は内面が黒色をなす土器で、同16にみるとおり、底部内外面から貼付して成形されたとみられるが、底部外面が剥離している。

底径は図2の11(7粂)、13(5.1粂)、14(6.2粂)、15(15.4粂)、16(6.5粂)、17(5.2粂)、18(6.1粂)、19(5.2粂)、20(5粂)、21(7.4粂)、24(5.2粂)、26(6.2粂)、27(5粂)、32(4.5粂)で、4.5～7粂以内に集中する。

これらの土器は胎土焼成が良く硬い土器であるが、同24・26、31は淡黄色を呈する他はすべて、赤褐色の土器である。

図2の12・13・29・30の4点は、くびれ部分が円味をもつタイプで1.8～1.6粂と厚底のタイプである。胎土は前者と同様であるが、表面調整がよく、焼成良好で、硬質である。底径は12(6粂)、13(5.2粂)、29(4.2粂)、30(4.3粂)で前者のタイプよりは、多少小形である。13と30はわずかに上昇底状となる。

図2の22は上げ底で、胎土には石英と赤褐色の粒が多く、混入し、暗黒色または灰色を呈する。底径5.3粂、底厚1.1粂

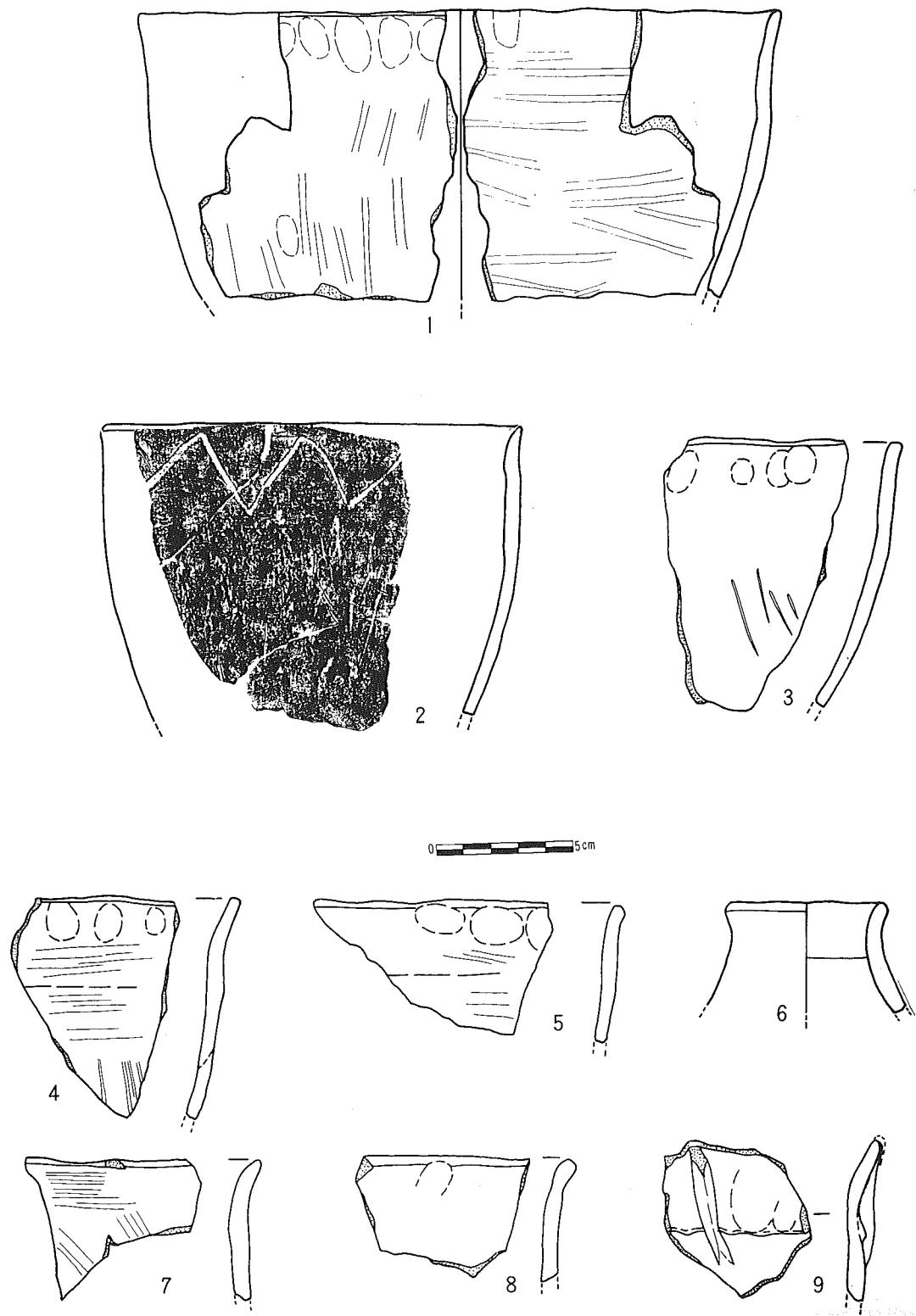
図2の33は円底状をなすくびれ平底土器である。底径2.7粂、胎土は他の赤褐色の土器と類似するが器色は外面は明るい赤褐色を呈する。

図2の24は前者のタイプに属するとみられるが小片のため不明。

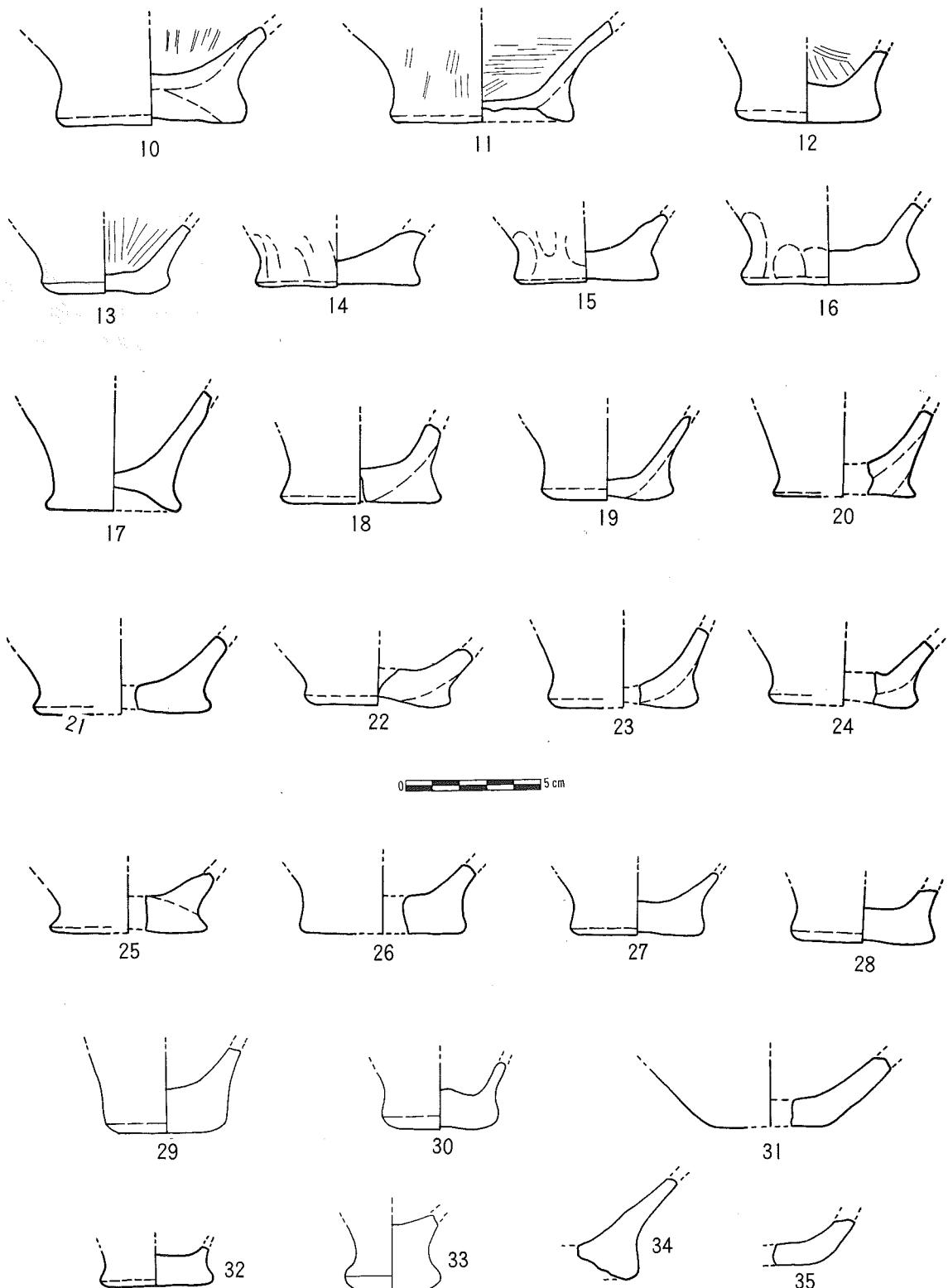
石 器

石斧 図3の1、4、図5の11が石斧である。図3の1は、短冊形をした両刃の石斧であるが刃部は磨耗している。刃部と側面を研磨されているが自然面を多く残している。頭部が一部欠損する他は、ほぼ完形の石斧である。最大長14粂、最大幅(刃部)5.8粂、最大厚3.3粂、重量415g、石質砂岩。

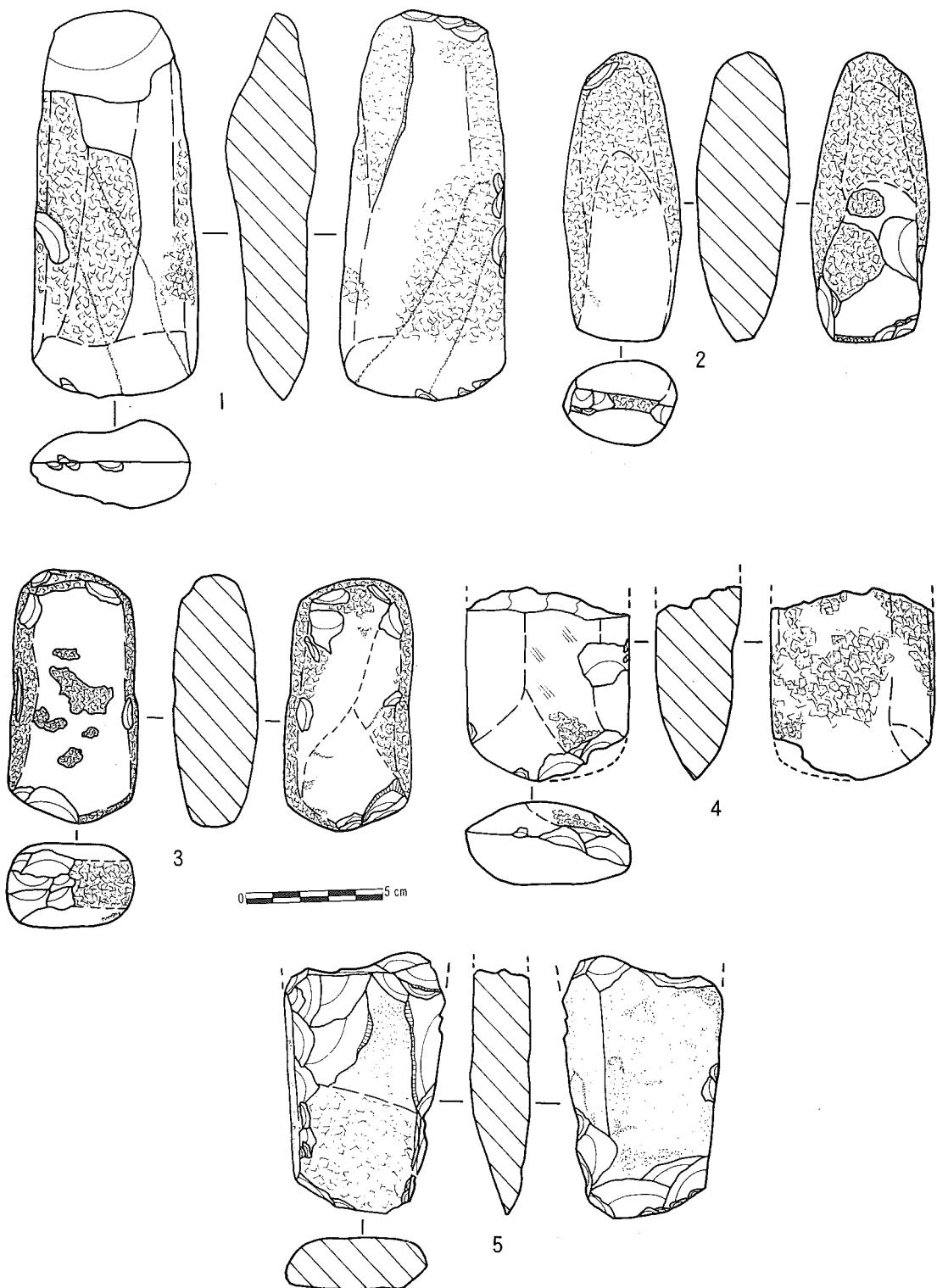
図3の4は長方形の石斧であったとみられるが、刃部から2.6粂のところまでが残存し、頭頂部が欠失する。刃部の約半分は欠失する、残存部でみると、蛤刃状をなし全面磨製の石斧である。図の波線で示したように、製作時のものとみられる陸線が認められる。最大幅5.8粂、最大厚3粂



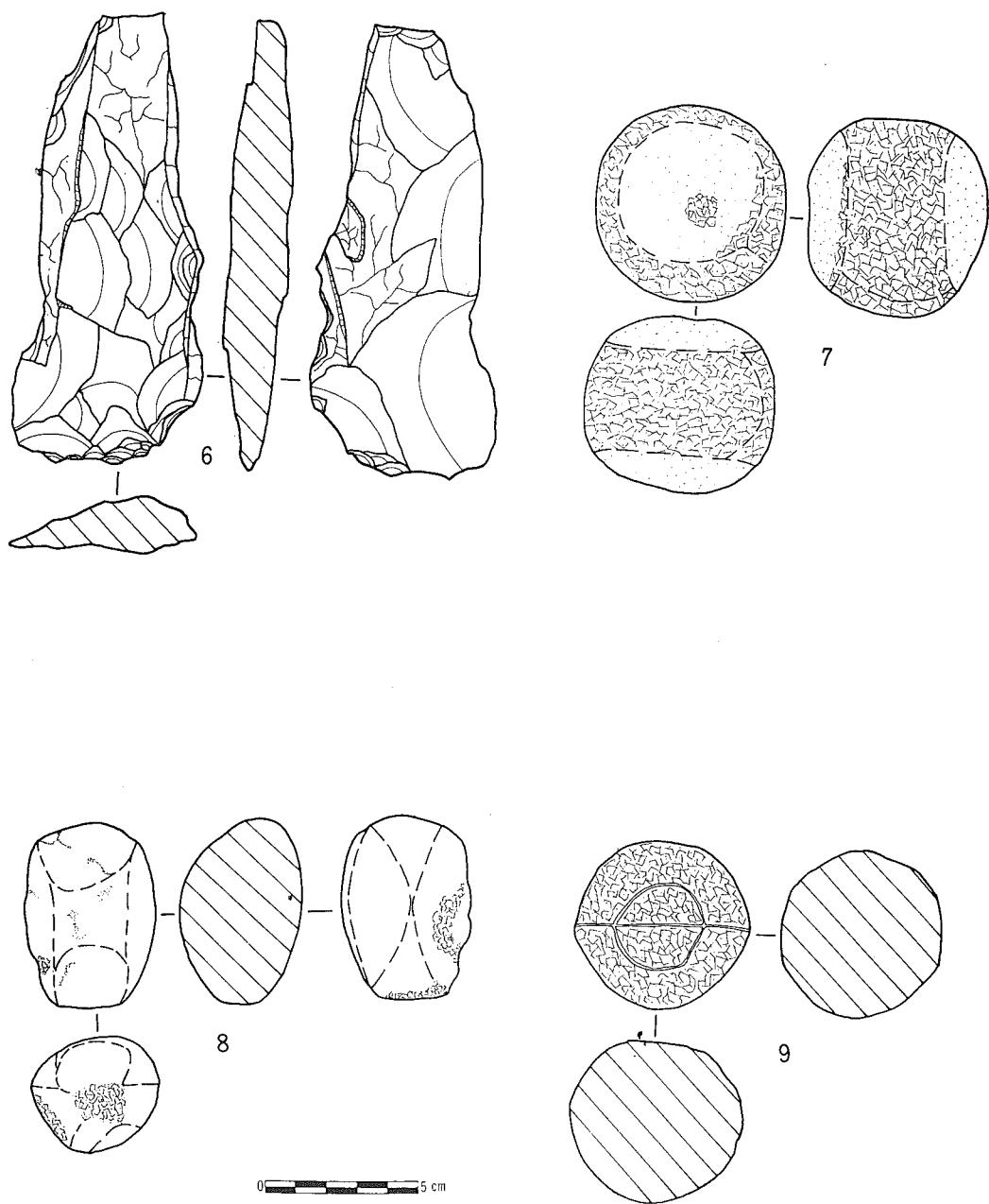
第1図 運天貝塚 土器



第2図 運天貝塚 土器底部



第3図 運天貝塚 石斧



第4図 運天貝塚 石器

重量 280g、石質砂岩。

図5の11は刃部が広がる発型のマサカリ状をした小形の両刃石斧であったとみられるが、刃部が幅2.5厘で磨り潰されている。したがって現状では石斧としては使用不可能な状態である。全面磨製である。最大長7.3厘、最大幅（刃部）5.2厘、最大厚2.3厘、重量140g、石質斑レイ岩。

図3の2は現形からみると石斧を敲石に転用したとみられる石器。長軸が反っている。最大長10厘、最大幅4.4厘、最大幅3.4厘、重量227g、石質砂岩。

図3の3は平面形が長方形の敲石で、図の下端部に敲打使用によるとみられる欠損がみられる他はほぼ完形である。側面に研磨が施され、機分抉りが入っている。最大幅4.7厘、重量260g、石質砂岩。

図3の5は側面に研磨痕がみられ、図の下端は敲打による調整が施されているが小片のため、用途は不明、重量165g、石質砂岩。

図4の6は図の下端部に敲打による調整剝離があり、石器製作途中で放置されたものとみられる。最大長14.8厘、最大幅6.2厘、最大厚2.1厘、重量180g、石質砂岩。

図4の7は球状をした磨石と凹石兼用の石器である。全面研磨が施されている。一面に敲打による凹がみられる。直径約6.5厘の球状をなしている。重量368g、石質斑レイ岩。

図4の8は隋円形をした磨石で、図に波線で示したように幾つかの面をもち完全な卵形ではない。最大長6.2厘、最大幅4.2厘、最大厚3.8厘、重量165g、石質砂岩。

図4の9は球状の磨り石で、全面研磨が施されている。図に示したように球状を分断するように乳白色をした筋が入っている。直径5.2厘、重量238g、石質砂岩。

図5の10は筒形をした敲石（ハンマー）とみられる。図の上下端に敲打痕が認められ、使用時のものとみられる欠損がある。やや方形で柱状に加工されている。上下端をのぞくとすべて研磨が施されている。最大長14.5厘・最大幅8.3厘、重量1124gと重量感がある。石質石英斑岩。

貝 製 品

貝 錘 図5の12と13の2個がある。魚撈用の綱の錘である。同図5の12はメン貝で13はアコヤ貝である。いずれも、2枚貝の頂部近くに穿穴されている。12は穴の大きさ1.3×2厘、重量15g、13は穴の大きさ2.9厘×2.2厘、重量110g

塩 屋 貝 塚

発 見 1958年 池原和夫氏発見

恩納村字塩屋部落の北はずれを流れる小川の河口附近に立地する砂丘貝塚である。位置は真栄田岬の南側付根にあり、前面の海岸には真栄田岬から長浜に至る発達したリーフが前面に広がっている。^{注3} 1958年に発見されたが1960年には採砂によって貝塚の殆んどが破壊されている。

今回紹介する採集遺物は、図6に示した13点である。これらの土器のうち図6の4～7の4点は岸本義彦氏^{注4}によって、弥生式土器として紹介されたものである。

図6の1は先端のするどい二叉の工具で刺突文が口頸部に施され胴部には紐を結んだような沈線文が施されている。口径部から胴部にかけての資料である。胎土には細い石英粒が少量混入し、器

色は赤褐色を呈する。器厚5耗の薄手の土器である。

図6の2は口縁頸部とみられる資料である。図の上端部と下部に幅約3厘の浅い曲線文が施されている。この文様から約2.8厘下に三本の曲線文がみられる。これらの文様には織維状の擦痕を残す。表面はナデ調整が施されている。胎土には石英粒と多数の砂粒が混入、表は赤褐色、裏は暗黒色を呈する焼成良好な硬い土器である。

図6の3は口縁部が外反する甕形の土器で、頸部から口縁内部にかけて、鞍状の凸帯文がはりつけられている。胎土には石英粒等の混入はみられず精選されている。器厚は4耗と薄手で、全面褐色を呈し、焼成が均一である。

図6の4は口縁部が外反し、胴部に張りのある無文甕形土器。口縁部から胴部にかけて漸次厚くなり、現存部最下端で約1厘の厚さとなる。胎土には石英粒が混入する他器面には黒色の鉱物質細粒が多数見受けられる。表裏面とも赤褐色を呈し、内面には器面調整の擦痕がみられる。

図6の5は口縁部がわずかに外反し、胴部が内傾する無文の甕形土器。内面は凹凸となっているが外面は箠磨きによる調整がなされ、手ざわりがなめらかである。器厚は口縁部をのぞくと、ほぼ9耗と一定している。胎土には石英と長石が多く含まれ、光沢を有する。器色は内面赤褐色で、外面は黒色を呈する。焼成良好で硬質の土器である。

図6の6は口縁が反り返る器形であるが、小片のため全体形は不明・口唇部に凹線が一条めぐらされている。胎土及混入物は4に同じ。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。焼成はきわめて良好で、硬質の土器である。器厚9耗。

図6の7は6とは対照的に、内傾する鉢形の無文土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、胎土には石英粒、長石、黒色の鉱物質が多く混入する。器色は表面内外面とも黒色であるが胎土中央部は、白色及ピンク色となる。焼成はきわめて、良好である。器厚約1厘である。

図6の2・4・6・7は胎土の混入物・焼成、器面調成が丁寧であることなど、沖縄の現地産土器とは異質であり、移入土器とみられるものである。同図5も含めて、前述したように、弥生式土器として報告されているが、弥生式土器として取扱ってよいか確定はできない。今後なお検討をする土器である。^{注5}

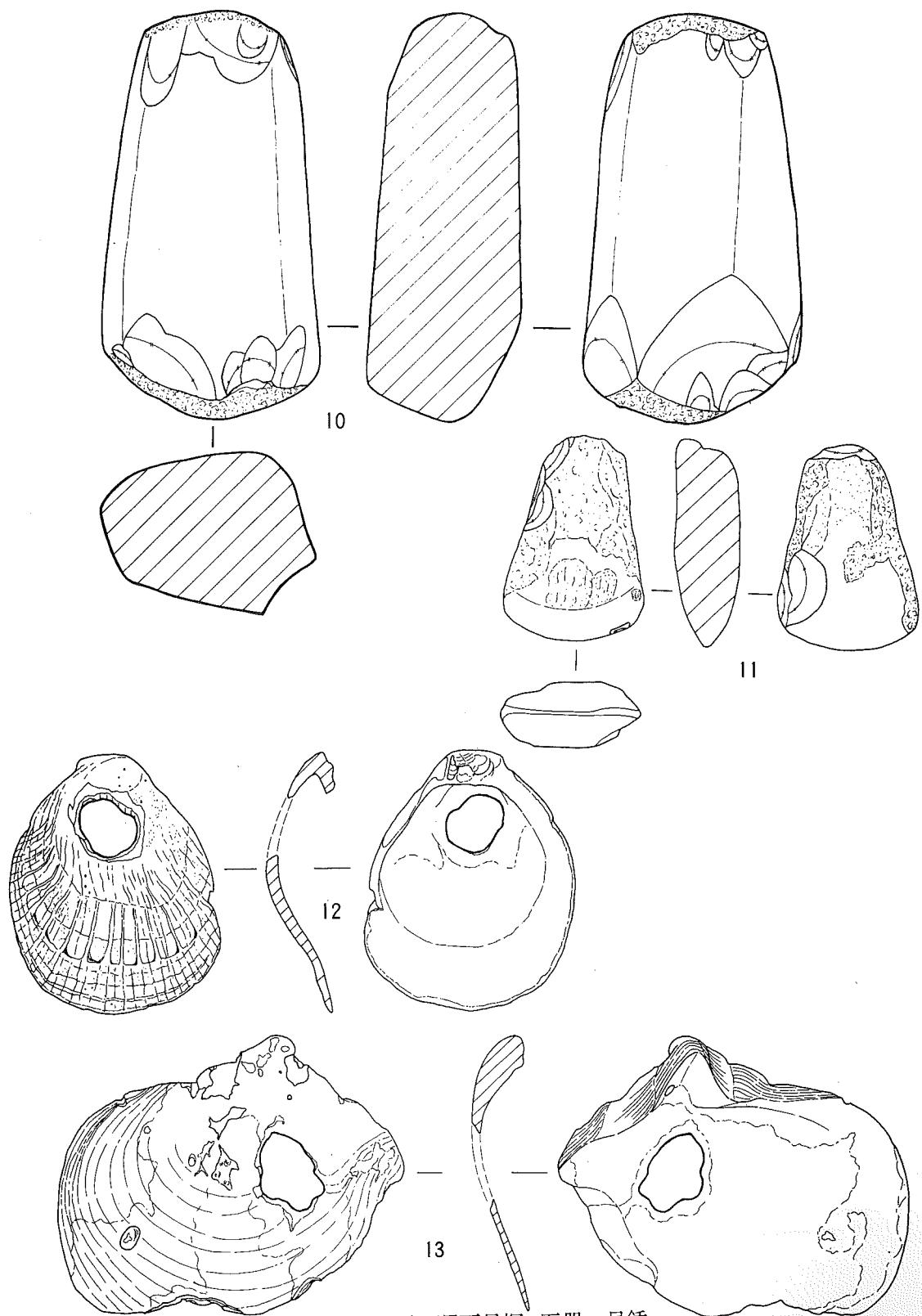
図6の8と9は尖底土器、胎土には石英粒、砂粒を含む、外面赤褐色、内面黒色の典型的な現地産の後期土器である。器厚は8が1.8厘と厚く、9は1.3厘と底部としては薄手の土器である。

図6の10はいわゆるくびれ平底の土器であるが内面の立上りが急で直角に近いため、現存部でみると筒形となる。胎土には石英が混入し、焼成が良く、硬質の土器で全面的に褐色を呈する土器である。底径3.8厘の小形土器。

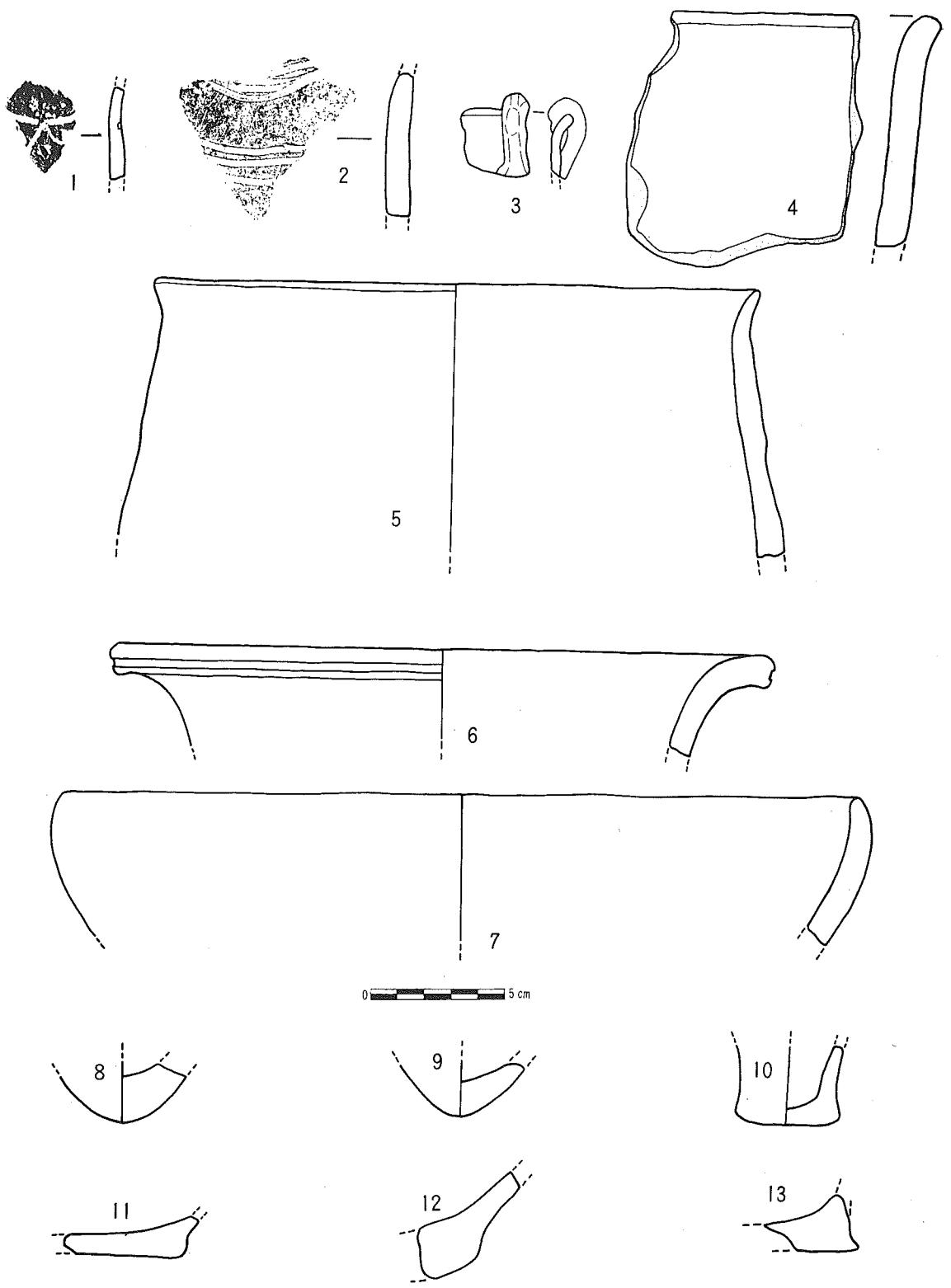
図6の11は底径の大きいくびれ平底とみられるが小片のため器形はよくつかめない。胴部への立上りが外側へ傾いており、胴に膨らみをもつ器形が想定できる。胎土には多量の石英粒混入、底厚8耗と薄手で全面赤褐色の土器である。

図6の12は、いわゆる乳母状尖底であるが小片のため特徴はよくつかめない。胎土には石英粒が混入、器色は外面褐色で内面黒色、底部の厚さ1.8厘と厚手。

図6の13はくびれ平底の土器、小片のため器形不明、胎土及器色は、12に同じ。底部厚1.2厘。



第5図 運天貝塚 石器・貝錘



第6図 塩屋貝塚 土器

具志川グスク

中頭郡具志川村字具志川の東方、金武湾に面した標高約20米の琉球石灰岩からなる独立した丘上に立地するグスクである。具志川部落との間にほぼ東西に走る県道37号線道路が走っており、この道路からグスクへは、土手状の道で1箇所通じている他はすべて断崖となっている。

この台地の西側に一部野面積みの石積みが残っているが大半は破壊されたとみられる。沖縄にはこのグスクの他同名のグスクが糸満市と久米島にあり、そのいずれも海岸に突出した丘上に築かれている。

1965年、高宮廣衛氏等によって、発掘調査がなされた。また、グスク北側の海に面した所の一部が崩壊し、その直下に遺物の堆積がみられる。そこから採集された遺物の一部が新田重清氏によって報告されている。それによると、グスク系土器、須恵器、青磁、古錢、布目痕を有する土器などが採集されている。

土器

図7の15は口縁部が外反する鉢形土器で、口縁部から胴部にかけて、器厚が8~9耗でほぼ一定し、口唇部が平口となっている。胎土には、少量の石英粒と砂粒が含まれている。器色は内面下端部が赤褐色でその他は淡黄色をなし外面と胎土中央部は黒色となっている。焼成良好で硬質の土器。

図7の16は口縁部がくの字状に外反し、口唇部が尖るタイプ。器厚は5耗と薄手で、胎土には白色の石灰岩粒を多く混入する。内外部とも籠削の後ナデ調整がなされている。焼成良く硬質である器色は外面黒色で内面は淡黄色となっている。

図7の17は口縁部が内湾する浅鉢形土器である。口唇部は平口をなし、器厚は5.5耗でほぼ均一である。内外面とも籠削りの後、ナデ調整が行なわれている。胎土には白色で偏平な物質を多く含む。器色は外面の一部が黒色を呈する他は淡黄色を呈する。焼成は良好で硬い。

図7の19は平底であるが小破片のため器種等は不明。底部から胴部への立上の部分は円味をもちながら外傾する。上げ底状に籠削りがなされている。内面にはナデ調整による擦痕がみられる。底部の中心部に向って、器厚が薄くなっている。最も薄いところで4耗、胎土には白色の物質と石英粒が混入する。全体的に暗黒色の土器である。

図7の20と21は、くびれ平底の土器、底部から胴部への立上りが外傾する。胴部に張のある深鉢形の土器が想定される。同21は底径6厘、底部厚5耗、両方とも胎土には石英が混入し、器色は赤褐色を呈する。

図7の22は口縁部が外反す口禿白磁の碗である。口縁部外側は口唇部から約2耗、内側は約5耗までが禿禿となっている。施釉されたところは光沢を有する。口径16.4厘、器厚最大5耗で、底部は欠損する。

図7の23は外反する青磁碗である。胎土は灰色で、内外面とも釉が施されており、くすんだ緑色に発色し、光沢を有する。貫入が多くみられる。口径17.2厘、器厚約5耗、底部欠損。

牧港貝塚

1932年 多和田真淳発見

本貝塚は浦添市字牧港桃原に所在する。字仲間から港川を経て東シナ海へ流れる牧港川河口近くの西側に隣接する東側に開口する標高3~4米の石灰岩洞穴内に形成された貝塚である。

洞穴内は現在拝所として拝まれており、前面に牧港川が流れ、断崖北面には風葬墓が点在する。

1983年の暮から県道153号路新設工事に伴なう県教育委員会による緊急発掘調査が実施されている。

土 器

図8の1は口縁部が外反する甕形の土器とみられるが、小片のため器種等不明。胎土には、石英粒と赤褐色の粒が多く含まれる。表面はナデ調整が施される。器色は内外面とも黒色、器厚、7厘。

図8の2は口縁部が直交をなし、口唇部が円くなり、口縁部から胴部にかけ内傾する鉢形の土器である。胎土には白色の物質が多量に混入する。焼成良好で硬質の土器。器色は褐色を呈する。器厚7耗。

図8の3は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプ、胎土には石英粒が混入する。器色は内外とも赤褐色であるが胎土中央部は黒色を呈する土器である。器厚9厘

図8の4は器形は前述の3に類似する。胎土には石英粒と砂粒が混入し、内外とも茶褐色を呈する土器である。器厚9耗。

図8の5は口縁部が直交し、わずかながら外傾する鉢形の土器で、口唇部先端が尖るタイプ。砂粉混入。外面上部が黒色。他はすべて褐色を呈する。器厚6厘、焼成良好で硬質。

図8の6は口縁部が直交し、口唇先端が尖って胴部が厚くなるタイプである。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器色は全体的に褐色となる。外面の調整がスムーズで手ざわりがなめらか。現存部下端部で1.2厘と厚手の土器。

図8の7は口縁部が直交する甕形土器。口縁部先端が尖るタイプ、外面はナデ調整がなされ、内面には擦痕がみられる。胎土には石英粒混入、器色外面は茶褐色で内面黒色となる。焼成良好な硬質の土器。

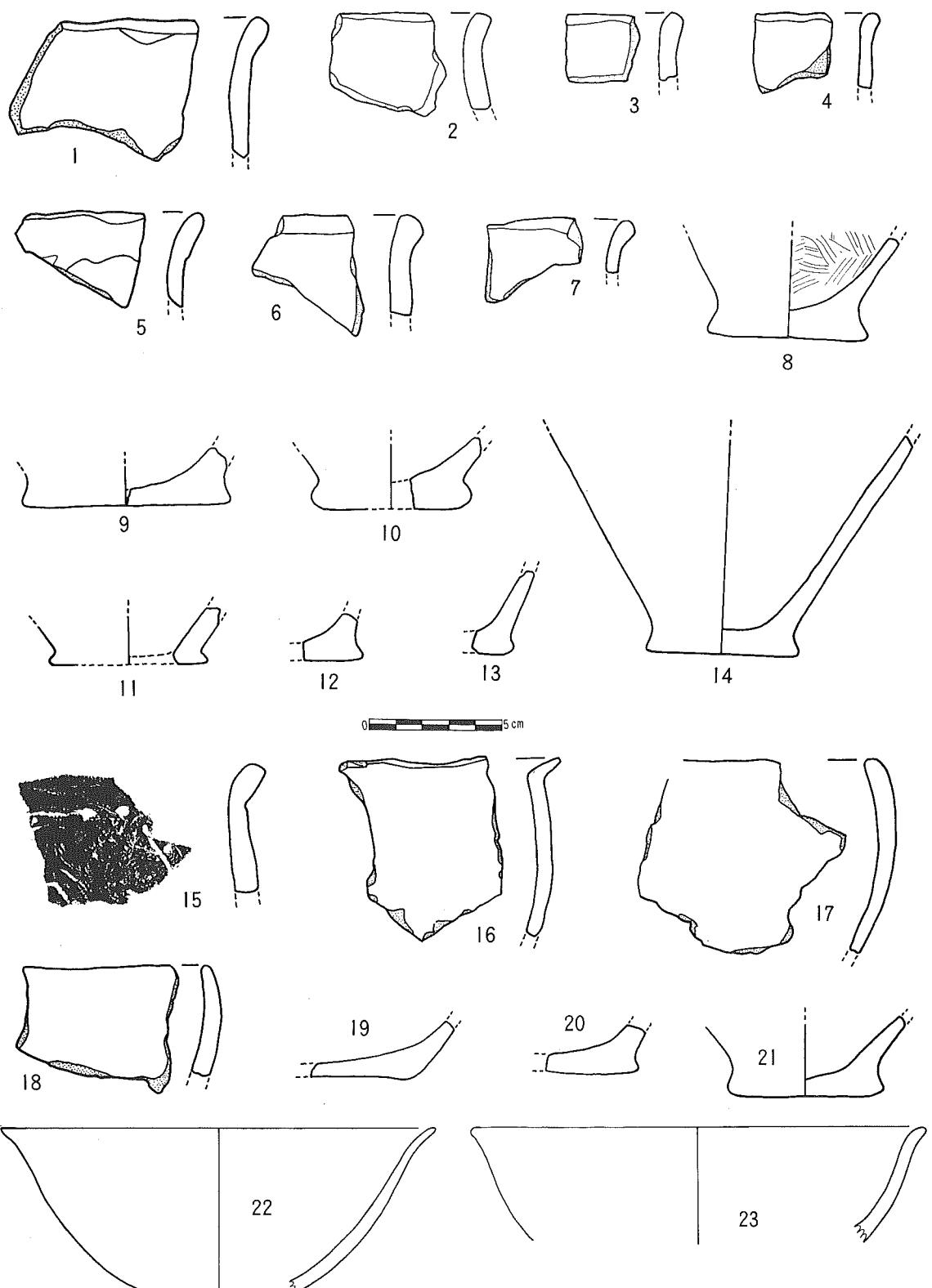
図8の8は口縁部が外反し、口唇部が円くなる甕形の土器。胎土には砂粒と赤褐色の粒が混入。器色は外面褐色で内面は淡黄色である。胎土中央部は黒色となる。焼成良好の硬質土器。

図8の9は口縁部が直交し、口縁先端が尖るタイプ、胴部が厚手の鉢形土器。胎土には石英粒、砂粒、赤褐色の粒等が混入する。器色は内外面とも褐色であるが一部煤状のものが付着し、黒色で胎土中央部が黒色、焼成良好な土器。胴部下端部で器厚1.1厘。

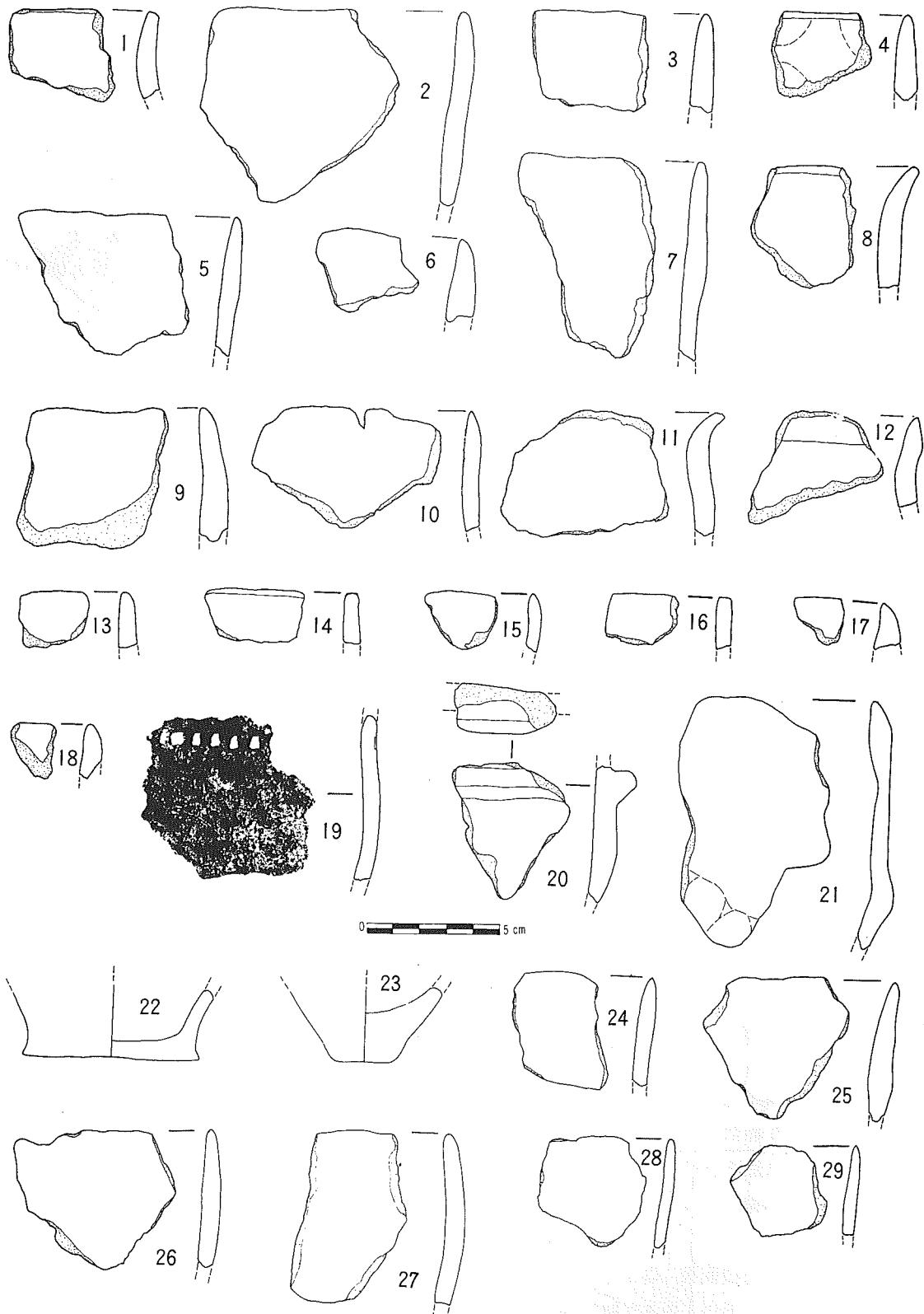
図8の10は口縁部が直交し、口唇部先端が尖るタイプ、胎土には石英が少量混入する精選された土器、全面赤褐色に焼上っており、焼成良好な硬質の土器である。器厚胴部下端部で7耗である。

図8の11は口縁部が外側へ折りまがる甕形の土器、胎土には石英粒、砂粒が混入、器色は内外面とも褐色で胎土中央部が黒色となる。内外面ともナデ調整が行なわれている。胴部下端部での器厚は9耗。

図8の12は口縁部が直交し、口唇部先端が尖った鉢形とみられる土器、外面口径部に陵線がみられる。胎土には石英粒と砂粒が多量に混入すたため粗い感じの土器である。内外面とも茶褐色を呈



第7図 (1~14)具志頭城跡土器(15~23)具志川城跡土器・白磁・青磁



第8図 牧港貝塚 土器

する。器厚は胴部下端で7耗。

図8の13は器形的には3に類似するとみられるが小片のため不明、胎土には多量の石英粒と砂粒を含み胎土は12に類似する。色は内外面とも茶褐色をなす。器色は内外面とも茶褐色をなす。器厚胴部下端で7耗。

図8の14は口縁部が直交をなす平口縁の土器、小片のため器形不明。胎土には石英粒等の混入はみられず多孔質で精選された軽い土器、器色は内外面とも赤褐色で部分的に灰色となり胎土中央部は黒色である。胴部下端部の器厚7耗。脆弱な感じの土器。

図8の15は口縁部が内湾し、口唇先端部が尖るタイプの小型鉢形土器。胎土には石英粒、砂粒が混入、器色は黄褐色で胎土中央部は黒色である。胴下端部の器厚4耗。軟質な土器。

図8の16は口縁が直交する、平口の土器、小片のため器種不明、石英及砂粒が混入、表裏面とも褐色であるが胎土中央部は黒色。表裏面ともナデ調整がなされている。胴の下端部で器厚7粩、焼成良好で硬質。

図8の17は、器形、胎土等の特徴が図1の2に類似する。

図8の18は口縁部が直交し、口唇部先端が尖り、円味をもつタイプ、小片のため器種等不明、胎土には石英粒と白色の粒が多数含まれる。器厚8耗。

図8の19は頸部から胴部にかけての破片、頸部に横捺刻文が一条施されている。内外面とも褐色、胎土には石英粒混入・器厚七耗。

図8の20は胴部外面に幅6耗の凸帯がはりめぐらされる胴部の破片。胎土には砂粒混入。器色外面褐色で内面は黒色を呈する。器の外面はナデ調整、内面は条痕を残す。胴部の下端部は内湾する器厚胴部で約1粩である。

図8の21は口縁部近くの資料、現存部外面下部には、つぎ目とみられる陵線がみられこのつぎ目の部分からくの字状に曲っている。器の内外面には成作時のものとみられる指頭庄痕が残っている胎土にはチャート粒と赤褐色の粒が混入する。外面褐色内面淡黄色となる。器厚胴下端で5耗、焼成良好な硬質の土器。

図8の22はくびれ平底土器、胴部への立上りが外傾し、胴部に膨みをもつ甕形の土器と推察される。胎土には石英粒と砂粒を含む。器色は外面褐色で内面は黄褐色、底部の厚さ8耗、胴部厚5耗、内底部には櫛状の擦痕を有する。焼成良く硬質の土器、底径6.7粩。

図8の23は乳母状尖底が押しつぶされて、平底状となった土器底部、胴部への立上りが急である。胎土には石英粒と砂粒が混入、器色内外面とも茶褐色を呈する。底径2.2粩、底部厚1.9粩と厚底の土器である。

図8の24は口縁部が直交し、口唇部先端が尖るタイプの土器。胎土には石英粒と砂粒が多量に混入する。器色外面黑色で内面褐色。焼成弱く、脆弱な土器である。厚さ7耗。

図8の25は胎土、器形等の特徴が21に類似するもので、21と同一個体であると考えられる土器である。器の内外面に指頭庄が残る。

図8の26は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプである。胴部は内湾する鉢形の土器、胎土には石英粒、石灰岩粒、赤褐色粒が多く含まれる。器色は外面褐色で内面淡黄色、内外面にナデ調整がなされている。胴部下端部は6耗、焼成良好で硬質の土器。

図8の27は口縁部が内湾し、口唇部先端が尖る鉢形の土器である。胎土には石英粒、砂粒が混入する。器色は外面黒色で内面淡黄色、器厚胴部下端部で8mm、焼成良好。

図8の28は口縁部が直交する鉢形土器、胎土には石英粒が混入、器色外面黒色で内面褐色、器厚4mmの薄手土器である。

図8の29は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプ、小片のための器種不明。胎土には石英粒、砂が混入、器色内外面とも赤褐色で胎土中央部は黒色。器厚胴部下端で5mm。

具志頭グスク

具志頭村字具志頭の東方須武座原にある。字仲座から字具志頭の南側を東北—西南に伸びる標高80~100mの琉球石灰岩丘陵の東北端に立地する。字具志頭側以外の他の3面は断崖をなし、天然の要塞となっている。

グスクの西方最上部には「タカヤツクワ」と呼ばれる物見台があり、それから北側には高さ1m前後の野面積みの石積みが残っている。この石積の北側には高さ1m前後の野面積みの石積みが残っている。この石積の北側には城門が開かれている。

ここに紹介する遺物は1954年、グスク内御嶽周辺から採集されたものである。また本遺跡から採集された。平口縁でくびれ平底の黄褐色をした甕形土器を多和田^{注6}は具志頭城式土器と命名した。

土器

図7の1~3は口縁部が外反し、口唇部が平口をなす器形で胎土は緻密で、器色は黄褐をなし部分的に赤褐色を呈する。

図7の4~7は口縁部が外反し、口唇部が円味をもつタイプ、胎土は緻密で精選された感じがある。胎土には石英等の混入はみられない。器色は赤褐色で前者に比して、焼成が良く硬質である。

底部は図7の8~14のように典型的なくびれ平底のタイプと、いわゆる乳母状尖底を上から押つぶしたようなくびれ平底のタイプ(図7の9~13)に分けられる。前者は口縁部への移行する部分がゆるやかで、胴部の張が少くないタイプ、後者は外側へ急なカーブをとり胴部へ移行する胴部に膨みを有するタイプである、口縁部でみると図7の1~3と8~14が同タイプ、図7の4~7と9~13が同タイプであるとみられる。前者には器面調整による擦痕がみられる。この前者のタイプの土器が多和田のいう具志頭式である。底径は図7の8(6.1mm)9(8mm)10(5.8mm)11(6.2mm)14(5.8mm)である。

さいごに、遺物実測をしていただいた沖縄国際大学4年次上地千賀子さんに感謝致します。

注1、『今帰仁村史』今帰仁村役場 昭和50年

2、「渡喜仁浜原貝塚調査報告書(1)」今帰仁村教育委員会 1977年3月

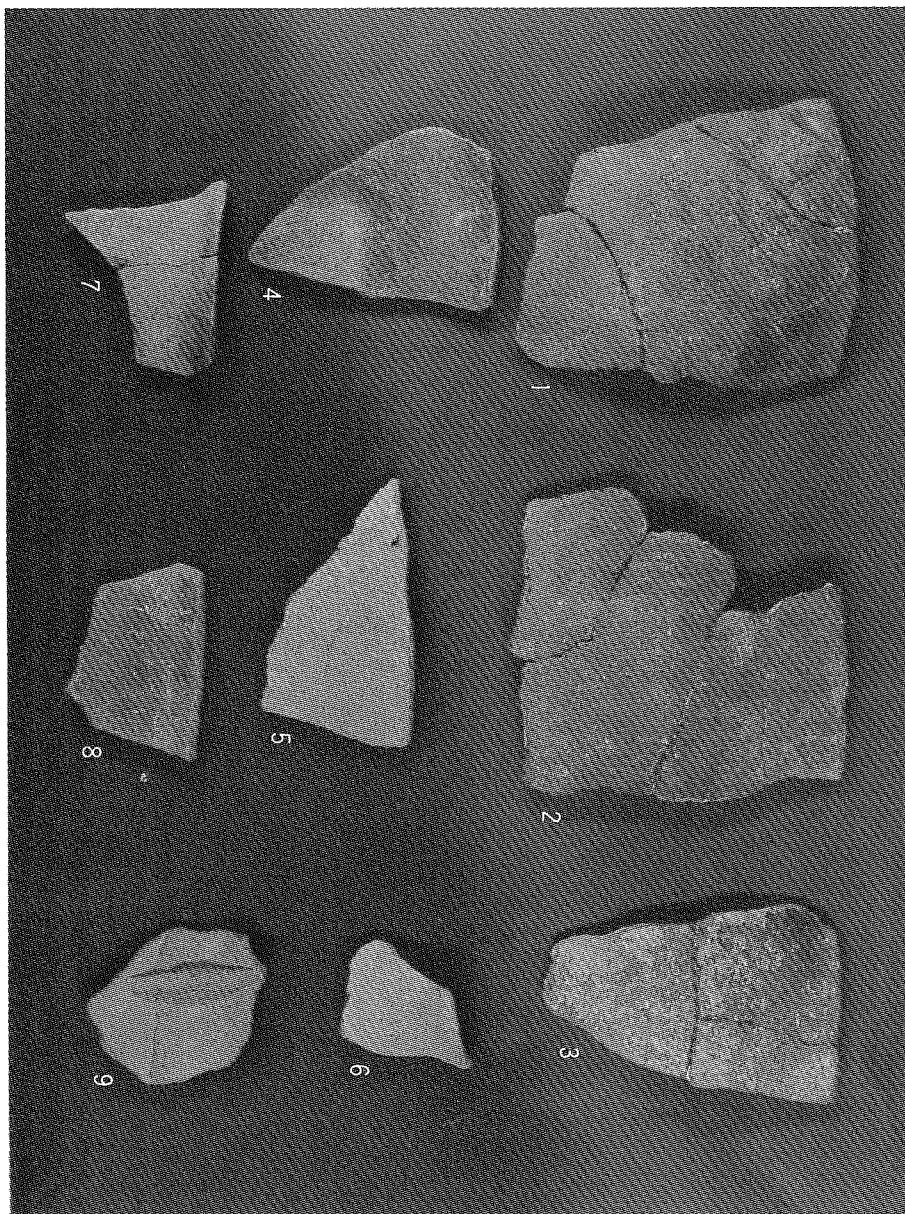
3、多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(3)」『琉球政府文化財要覧』1960年

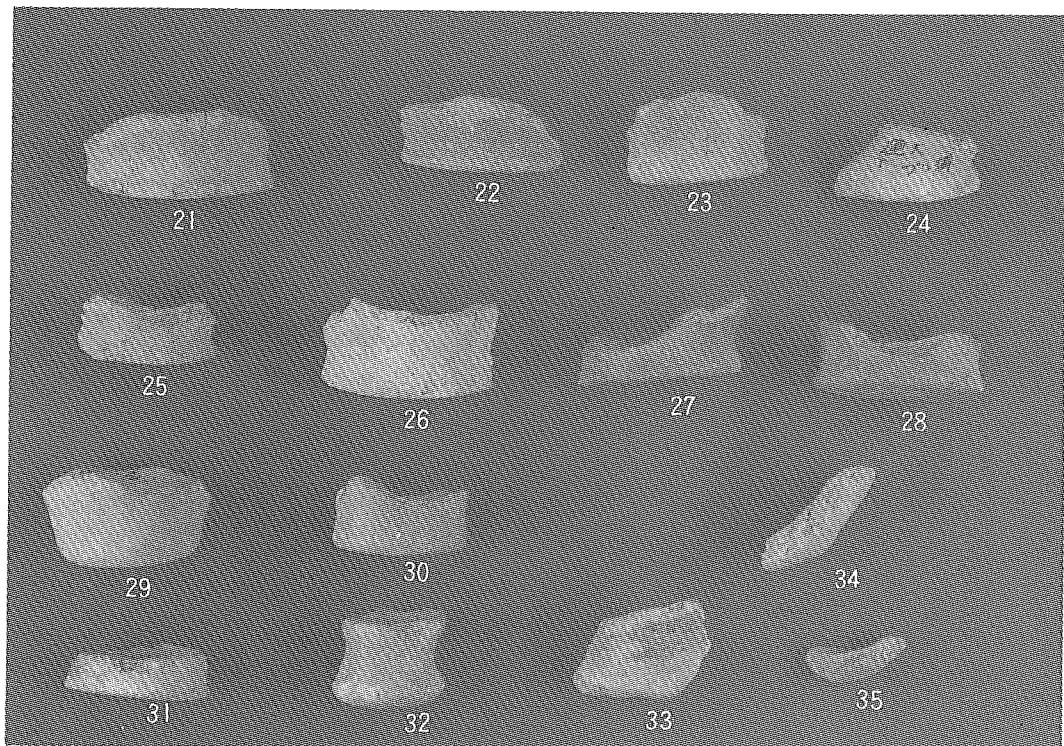
4、岸本義彦「沖縄出土の弥生土器管見」『南島考古』沖縄考古学会 1983年

5、上同

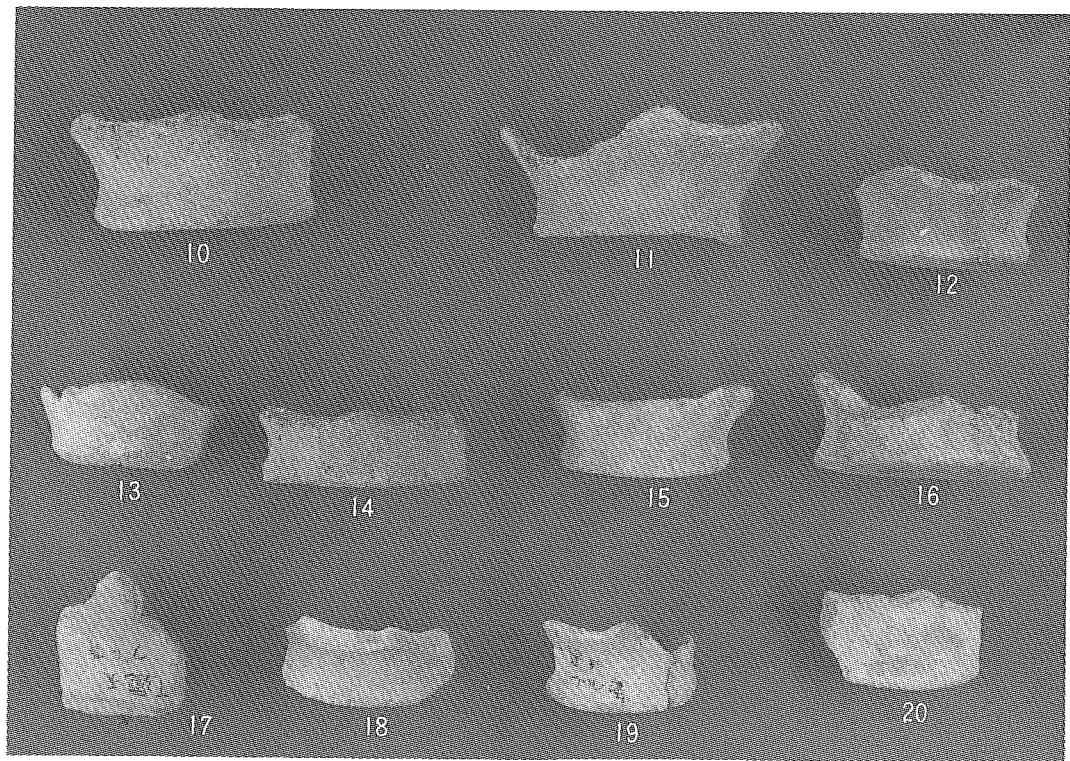
6、注1に同じ

第1図版 運天貝塚 土器

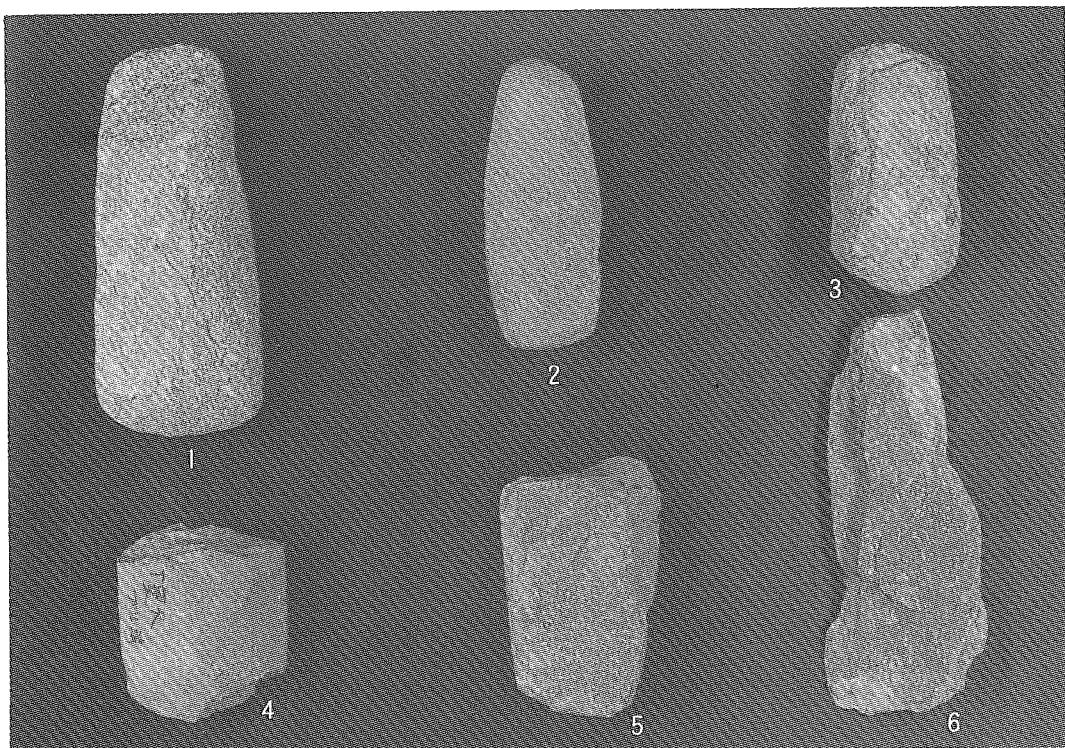




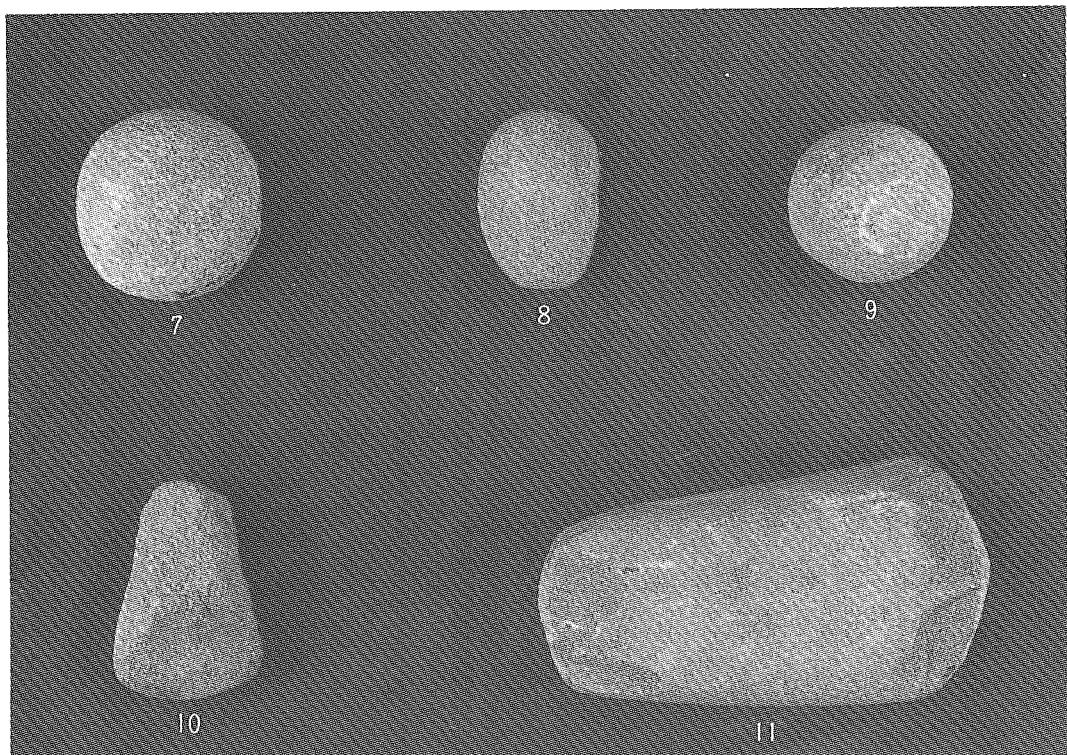
第2図版 運天貝塚 土器底部



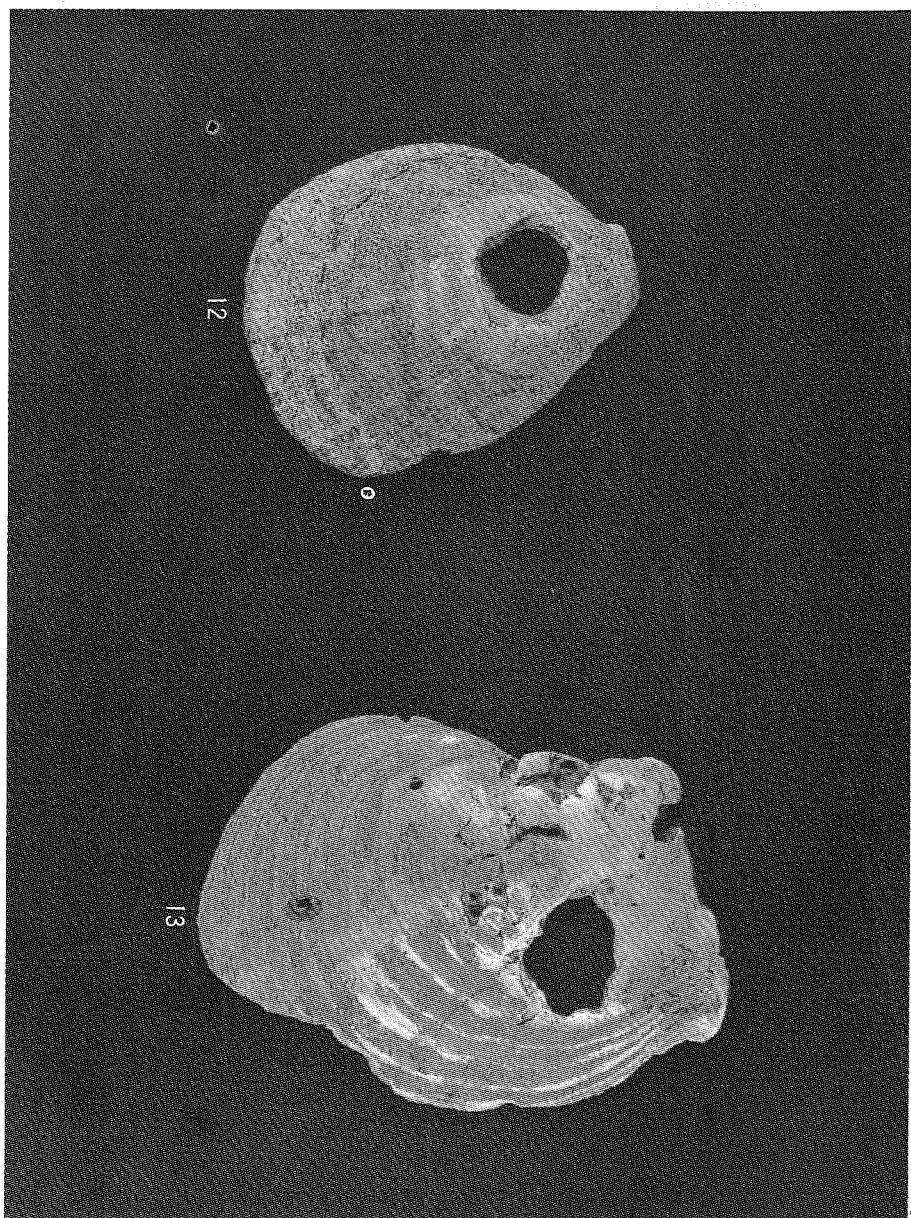
第2図版 運天貝塚 土器底部



第3図版 運天貝塚 石器



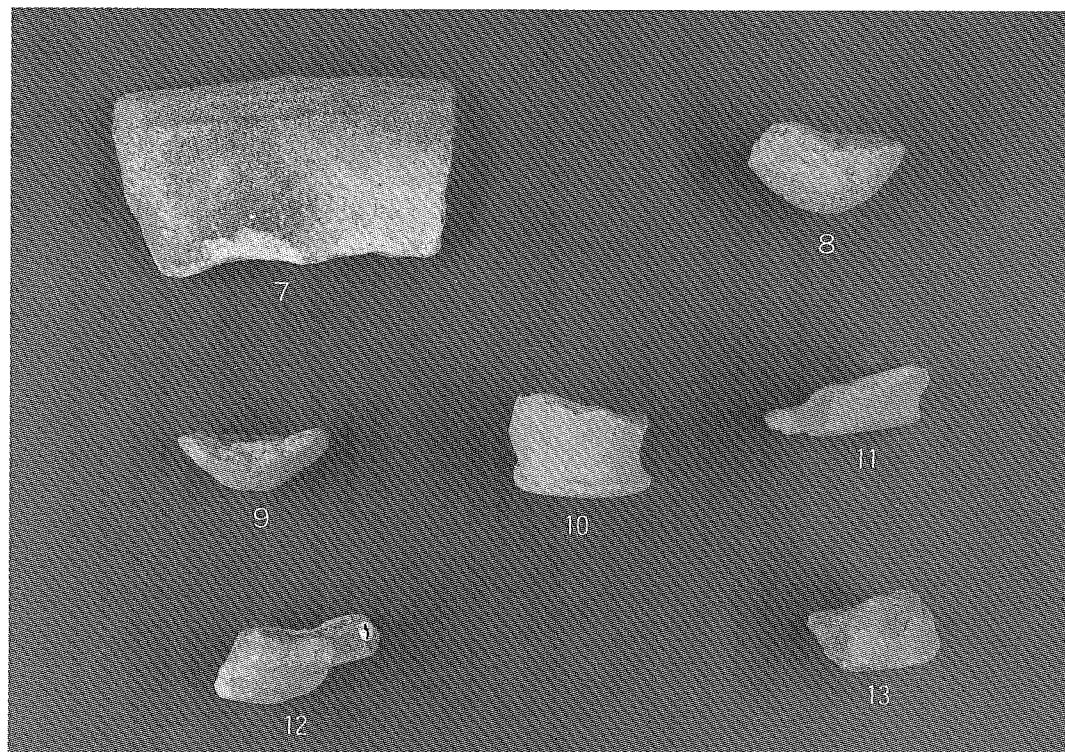
第3図版 運天貝塚 石器



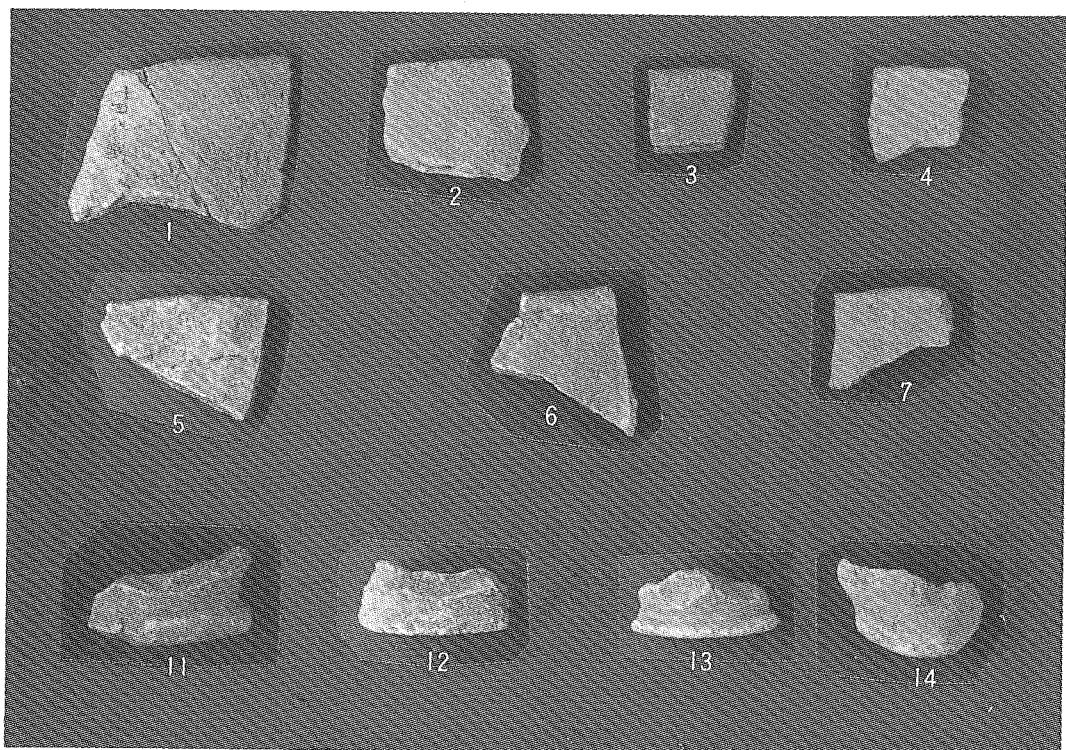
第4図版 運天貝塚 貝錘



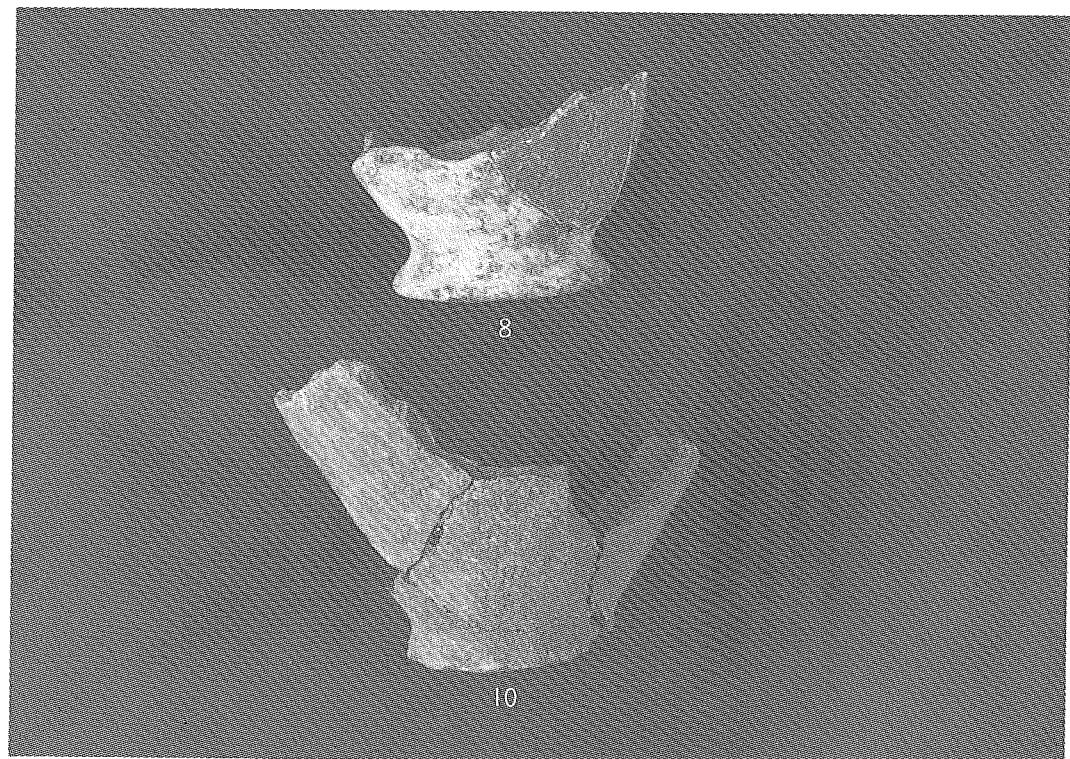
第5図版 塩屋貝塚 土器



第5図版 塩屋貝塚 土器



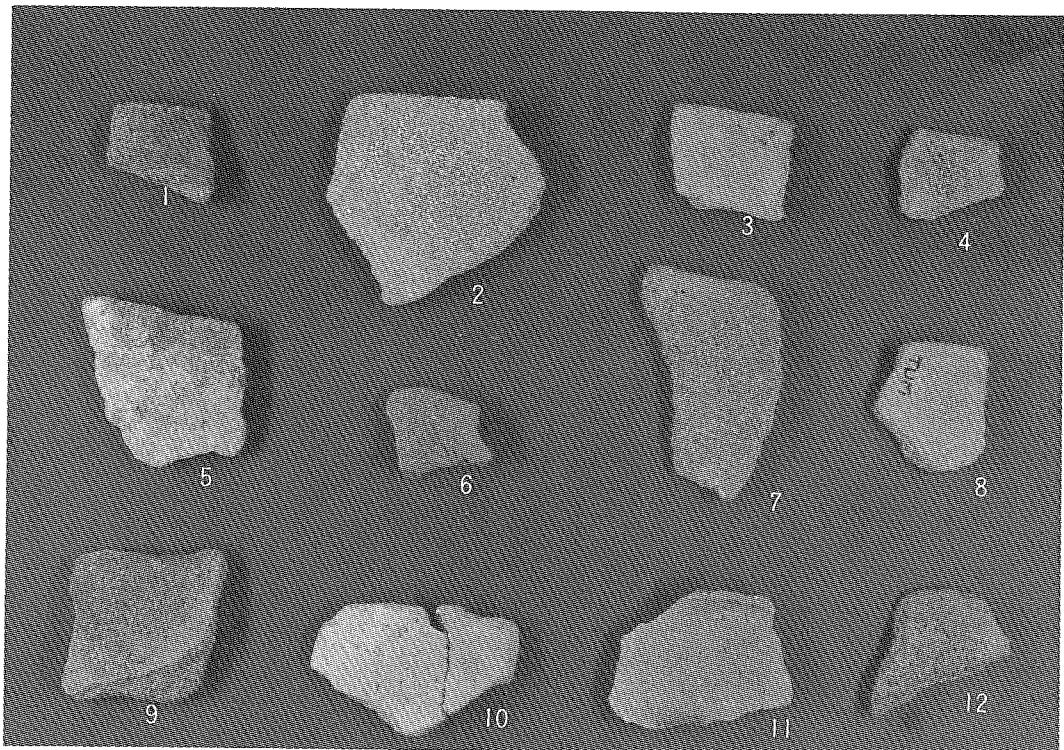
第6図版 具志頭城跡 土器



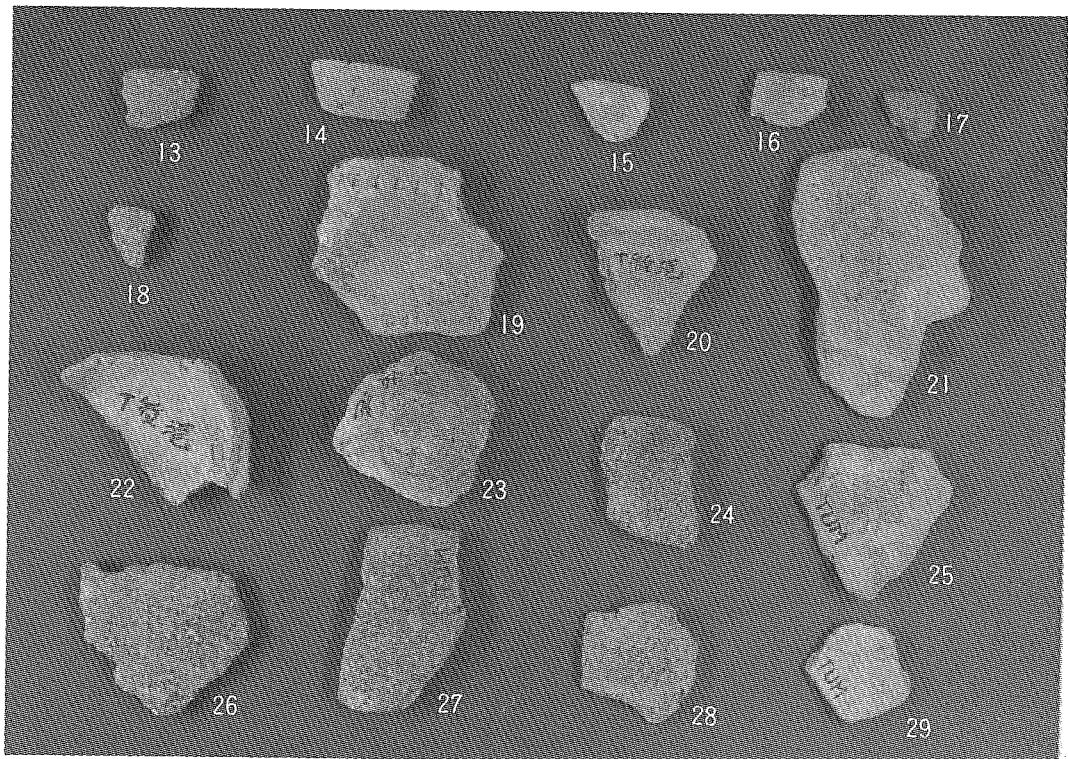
第6図版 具志頭城跡 土器



第7図版 具志川城跡 土器、白磁、青磁



第8図版 牧港貝塚 土器



第8図版 牧港貝塚 土器